

## 「食糧安全保障」を基本とした農業政策を！

米価の高騰が終わりません。国は備蓄米を放出しましたが、スーパーなどの米の価格は数百円程度しか下がらず、家計を圧迫しています。

価格もさることながら、米が買えなくなる事態が私たちを不安にします。

主食であるコメ、生鮮野菜、たんばく源など、基本的な食糧の自給率を確保する「食糧安全保障」を基本とした政策を国はとるべきです。

4月30日に東京でトラクター30台が行進する農業者のデモ「令和の百姓一揆」があり、「コメの値段は上がったも、農家の時給は10円！」という衝撃的な事実の訴えがありました。

自分たちが食べるものを守るためには農家の生活も保障しなければなりません。

生活者ネットワークは、東京の農地と都市農業を守る政策を推し進めています。

都内の農地を農産物の供給のみならず、緑の空間、防災のための余裕地としても残すべきです。

そして、都内産農産物の供給先として給食に活用する仕組みをつくり、人も土も健康にしたいと考えています。



## 飛騨市の「学校作業療法室」に注目しています！

飛騨市では全国でも初めての、すべての学校に保健室があるようにすべての学校に「学校作業療法室」を配置しました。

学校では、子どもたち一人ひとりが抱える課題が多様化しています。不登校や行き渋り、発達障害、学びや遊びの困難……。先生たちも懸命に子どもたちに向き合い、支えてきましたが、先生だけでは手が届かない部分があるのも現実です。

現在稲城市でもスクールカウンセラー（臨床心理士）やスクールソーシャルワーカー（社会福祉士）が全ての学校のサポートをしています。飛騨市では「作業療法士」を全校に派遣し、一人ひとりの悩みに合わせた「ワンステップ」を一緒に考え、担任の先生や学校と福祉も連携してチームで支える取り組みを始めています。

作業療法士は「Occupational Therapist（オキュパイショナル・セラピスト）」と表し略してOTとも呼ばれる、「からだ」とこころのリハビリ専門職です。日本では病院のリハビリの担当と思われがちですが、アメリカやカナダでは「作業療法士」が学校に配置されていることが一般的で、一人ひとりの生徒に合わせた生活面や学習面での助言やトレーニングなどを提案し

ます。そして、その数も多く、子どもがなりたい職業の上位にくるのだそうです。

飛騨市は、まず市に児童精神科医を確保し、全ての学校に「学校作業療法室」（OTルーム）を置き、「自分で考えて、実行し、確認して次のステップへ」を作業療法士と一緒に考える「CO-OP（コアップ）アプローチ」という手法で、子どもたち一人ひとりの「困った」を解決する取り組みに挑戦しました。

規模の小さな自治体の柔軟性と県の福祉分野の行政マンだった市長の思い切った挑戦がインクルーシブ教育を推し進めています。稲城市においても取り入れやすい方法だと思い、大変注目しています。



参考文献：すべての小中学校に「学校作業療法室」を（クリエイティブ）  
参考記事：（NHK）



### <3月の一般質問より>

#### ■幼保小の架け橋プログラムについて

「小1プロブレム」を予防し、幼保小の協働による架け橋期の教育の充実が求められています。

稲城市では、おやこ包括支援センターが主催する「乳幼児施設連絡会」が年2回開催され、1回は幼保小が参加し小学校へのスムーズな接続と連携を目的とした連絡会となっています。

「情報共有する機会となった」「ここにどまってしまう、実践に繋がっていないことが課題である」などの意見があり、『幼保小の架け橋プログラム』に関する今後の取組については、市内の乳幼児保育及び幼児教育と小学校教育の関係者が連携して、カリキュラム・教育方法の充実・改善を進めていくとの市の回答を得ました。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」「非認知能力」や「主体的・対話的で深い学び」など核心の課題について共通認識のもと、幼保小の協働でプログラム作りに取り組んでいくことを要望しました。

## inagi 子どもの声からはじめよう！プロジェクト

今年も出ます。 城山公園「手づくり市民まつり」5月5日  
子ども広場(芝生広場)10時～15時半



今年は+laugh(アンドラフ)さんの「プレーカー」が来てくれます！

どこにでも出かけてプレーパーク遊びができる「プレーカー」を体験してみよう！

(※プレーカーの時間は11時～15時まで)



←大きなジェンガ

「プレーカー」

## 村上洋子 と おしゃべりタイム

日時：5月10日(土) 13:00～14:30

会場：稲城ネット事務所(稲城駅近く、百村1608-3 サンコーポ202)

Google meet 併用 <https://meet.google.com/mkf-sovo-ipu>

3月議会の報告も致します。 どうぞご参加ください。





## 村上洋子 いきいきレポート

2025 年度 稲城市一般会計予算は  
過去最高を更新 460 億 5 千 3 百万円

予算規模は昨年の420億8千万から39億7千3百万円上回り 9.4%の増となりました。

これは国庫負担金の増(子どものための教育・保育給付費負担金)、都支出金の増(公立学校給食費負担軽減補助金)によるところが大きく、市税も全体では 6.4%の増と堅調です。

今年度予算の特徴は、昨年途中より実施された給食費の保護者負担の無償化を年間実施すること、国施策で 2026 年度から実施される「こども誰でも通園制度」に向けてプレ事業を行うこと、市独自の取り組み

としては、深刻なバス運転手不足により減便などが予想される市内公共交通の維持に向けて新たな交通手段の導入などを検証する予算を確保したことなどが挙げられます。

その他まんべんなく各分野の予算要望をかなえた内容の予算となっており、特別会計予算を含め全ての予算について原案通り採択され可決成立しました。

物価高騰は続き、特に米の値段の跳ね上がりで生活費の負担は増していますが、市民生活を支える行財政となるかを注視していきます。



## 村上洋子の注目ポイント

## &lt;子ども関連&gt;

## ■養育費確保支援事業 40万円(国1/2、都1/4、市1/4)

村上洋子が議会において度々取り上げ要望してきた養育費確保のための手続きにかかる費用の一部補助が実現しました。公正証書や調停証書等の作成などに 5 万円を上限として補助されます。詳しくは市のホームページで「養育費確保支援事業」を検索してください。



## ■こども誰でも通園制度プレ事業 5673万2千円

こども誰でも通園制度の本格実施は 2026 年度からですが、今年度は実施に向けて幼稚園4園でプレ事業を実施する予定。

## ■妊婦のための支援給付 8529 万円

妊産婦に対して妊娠後・出産後にそれぞれ 5 万円を給付します。

## ■産後ケア事業の拡充 822 万円

デイケア(日帰り型)産後ケアを市立病院で実施します。

## &lt;保険・福祉・環境&gt;

## ■ふれあいセンター若葉台の開設

ふれあいセンターは 9 か所となり、市内全地区での開設が実現しました。

## ■高齢者の保健事業と介護予防の一体的事業の実施 240万円

健康不明者を把握、適切な支援に繋がります。

## ■公園整備

吉方公園改修整備、(仮称)根方谷戸公園の整備、JR 南武線高架下公園整備、南山地区公園整備。

## &lt;交通環境(モビリティ)の向上&gt;

## ■稲城駅南口駅前広場及び京王よみうりランド駅南口駅前広場の整備

## ■新モビリティ交通実証実験 4056 万 1 千円

新たな交通手段の導入を含めた市内のバス公共交通路線の見直し。

## ■持続可能な行財政運営のための調査・研究 1510万3千円

南山地区における新しい公共交通の調査・研究をおこないます。

## &lt;DX 関連&gt;

## ■デジタル人材の任用 332 万 3 千円

## ■公共施設予約システムの更新 658 万 3 千円

若葉台公園管理棟会議室が追加されます。

## ■クリーンセンター多摩川への粗大ごみ等の直接持ち込みに係る

ごみ処理手数料のオンライン決済導入 13 万 5 千円

## &lt;計画の策定&gt;

## ■第三次稲城市観光基本計画の策定 14 万 4 千円

## ■稲城市地域包括ケア計画(第5次稲城市高齢者福祉計画)・

稲城市介護保険事業計画(第10期)の策定 625万6千円

## ■第二次稲城市医療計画の策定 1000 万円

## 2024 年 12 月議会 村上洋子の一般質問



- 1 医療的ケア児の地域生活支援について
- 2 ヤングケアラー、若者ケアラーの調査と支援を計画に位置づけることについて
- 3 「はじめの100か月の育ちビジョン」についての稲城市の認識と今後の取組について

## 2025 年 3 月議会 村上洋子の一般質問



- 1 「主体的・対話的で深い学び」について
- 2 インクルーシブ教育について
- 3 幼保小の架け橋プログラムについて
- 4 学校給食の無償化による食材基準、食材調達への影響について

## 戦争と平和の記憶 ⑦



26歳の母と17歳の叔母は1946年から帰国するまで、特に叔母は24歳までの青春時代を八路軍(人民解放軍)に徴用され働いていました。

をみたのだそうです。帰国してから母によく手紙をくださり20年ぶりに再会したその元女学生は、母を見ると「シユウペイ! (須貝)」と抱きついて、長い長い思い出話を聴かせてくれました。

野戦病院は後方ですから激戦地からは遠かったこと、女性への暴行や農民に対する略奪行為は「見せしめ」のために銃殺刑にされるなど軍の規律が厳しかったことで身の安全は守られていたようです。

軍国少女だった彼女は日本が負けたことに納得がいかず、野戦病院のベットの中国兵にご飯を配るとき「リーベン(日本)ドウイシユウラ(負けた)、メイグアンシ! (しかたない)」と大声で叫びながらお粥を配っていたそうです。

「反省文」を書かなければならなかったそうです。試験もあり、勉強嫌いな母は消灯後の廊下の非常灯で妹に教わりながら試験勉強をするなど苦勞したと語っていました。

野戦病院にはコックのお爺さんがいて、母が高熱を出して病気がなった時、このコックのお爺さんは毎日、母が食べられそうなのを工夫して持ってきてくれ、「そのおかげで生き延びた」と母は語っていました。

徴用された看護婦の中には、たまに内地から日本軍の慰問に来るという終戦となり帰国しなくなった女学生もいました。今なら14、5才の中学生でしよう。初潮を迎えても手当の方法も知らないその女学生を年上の母たちはよく面倒

そのコックのお爺さんは、豚肉の塩漬けの塊だけを持って従軍し、野菜やそのほかのものは移動したところで調達をして、驚くほど様々な料理を出してくれたのだそうです。

(次回に続く)